【土木計画学研究・講演集　No.23(1)　2000年11月】

中学校における「まちづくり学習」授業プログラムに関する基礎的研究*

The standard report relating to "Urban studies" program in junior high school

大谷秀明**　三輪千夏***　中川義英****
By Hideaki OHTANI,Chinatsu MIWA,Yoshihide NAKAGAWA

1.　はじめに

１９９２年の都市計画法改正に伴い市町村における都市計画への住民参加が事実上義務付けられ、これに伴い行政、まちづくり協議会、NPO*1等により住民参加や合意形成の手法・制度が模索されてきた。しかし未だに住民参加・合意形成のシステムは確立されていない。この要因として、地域住民の地域・都市に対する情報、知識、関心の低さ、合意形成の過程には多くの時間と労力が費やされると同時に多くの経験と知識が求められること等が挙げられる。現在この様な経験や知識を積み重ねる場として、住民への「まちづくり学習」の必要性が問われている。

本研究は「子どものまちづくり学習」を通し、長期的視点によりまちづくりの知識や経験を養い、まちへの意識の喚起を行うと共に、教育的視点として後の人間形成に役立つと考える。ここでは義務教育課程の中でも特に、思考力・行動力が発達し社会生活への準備段階として重要な時期である中学生期に注目する。

本研究ではまず、市民参加の現状、既存プログラムの現状から「子どものまちづくり学習」課題の整理を行う。次に実際の授業では生徒の興味・関心、男女差、生活スタイルの違い等が授業の理解度に大きな影響を与えることから、まちでの行動・意識調査結果を踏まえ、中学生とまちとの関わりについて認識した上で効果的カリキュラム・手法について検討を行う。

2.　民参加の現状から見た「子どものまちづくり学習」課題

現在、市民参加は行政主導または一部の市民主導により行われているが、その形態は市のマスタープランへ反映された例から形式だけの例までと多様である。これは市民参加・合意形成の過程において未だ多くの問題を抱える為と考えられる。市民参加における問題点と、その対策としての「子どものまちづくり学習」における課題を表１に示す。

表１　市民参加の現状と「子どものまちづくり学習」課題

市民参加の現状	「子どものまちづくり学習」課題
・市民の都市計画に関する学習が不十分である	・都市計画に関する知識を学ぶ必要がある
・市民の合意形成をいかにはかるかが重要である	・合意形成の過程を経験する必要がある
・市民と行政とのパートナーシップをいかに作るかが重要である	・行政との様々な形での交流を行うことが後の相互理解へとつながる
・市民の積極的な参加は少なく、参加のきっかけ作りが重要である	・「子どものまちづくり学習」での活動を何らかの形で参加へとつなげることが必要である

3.　中学生とまちとの関わり（行動・意識調査より）

生徒の興味・関心、男女差、生活スタイルの違い等が「子どものまちづくり学習」授業の理解度に大きな影響を与えることから、東村山市立第七中学校*2１．２年生１３８名に"まちでの行動・意識調査"を行った。（１９９９．１２　実施）ここでは９９年度の３年生の授業内において「子どものまちづくり学習」実験的授業に協力が得られたことから同校を対象とした。

*キーワード：市民参加、中学生とまちとの関わり
**学生員　早稲田大学大学院　建設工学専攻
（〒169-8555　東京都新宿区大久保3-4-1　51-15-11
TEL 03-5286-3398　FAX 03-5272-9975）
***正会員　パルフェ　コミュニティー　デザインオフィス
****フェロー会員　早稲田大学理工学部土木工学科　教授

（1）まちにおける行動調査結果

行動調査では各設問（よく行く場所、好きな場所、嫌いな場所）を設け、東村山市地図とアンケート用紙への直接記入形式とした。各設問の解答結果をカテゴリー別に分類し、その結果を表２に示す。これより、中学生のよく行く場所と好きな場所はほぼ同じ結果（商店街、公共施設）となった。これまで一般的に子どもの好きな場所は自然等が中心であったが、次第にまちの中の施設や商店などへ移り変わりつつある。これは今の中学生にとって普段よく行く場所が自分にとって居心地の良い場所であり、同時に好きな場所であるためだと考えられる。またここでは男女間の差がはっきりと現れた。よく行く場所・好きな場所は男子が主に（環境地、スポーツ施設、遊戯）、女子が（公共施設、商店街）となった。嫌いな場所は（公共施設、都市基盤、環境地）が主であり、理由は（道が狭い、汚い、灯りが無く暗い）等のまち自体に関する事の他、（変な人がいる、恐い人がいる）等の人に関する事が多く挙げられていたことが特徴的であった。また学年が上がるにつれ（よく行く場所、好きな場所、嫌いな場所）が無くなる傾向があり、好き・嫌いに関わらずまちへの関心が薄れていることが分かる。

表２　まちでの行動について

カテゴリー	よく行く場所（平日）（人）					よく行く場所（休日）（人）					好きな場所（人）					嫌いな場所（人）				
	1年男	1年女	2年男	2年女	合計	1年男	1年女	2年男	2年女	合計	1年男	1年女	2年男	2年女	合計	1年男	1年女	2年男	2年女	合計
A.環境地	2	0	2	0	4	2	0	2	0	4	4	1	4	2	11	1	0	3	1	5
B.公共施設	4	3	12	4	23	3	6	12	10	31	2	6	3	7	18	4	7	9	3	23
C.商店街	9	18	7	11	45	6	15	6	13	40	5	16	7	11	39	0	3	2	0	5
D.スポーツ施設	4	0	0	0	4	6	0	1	0	7	3	0	5	0	8	0	0	0	0	0
E.歴史	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0
F.遊戯	3	4	5	3	15	4	8	4	3	19	7	3	6	2	18	0	0	1	0	1
G.都市基盤	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2	2	2	2	8
H.塾・習い事	3	2	3	5	13	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
無し	6	4	11	12	33	10	2	15	9	36	10	4	14	14	42	24	18	23	30	95

（2）まちへの意識調査結果

各質問項目について４つの選択支（全くない、あまりない、たまにある、よくある）を設け、その解答結果を表３に示す。これより、対象中学生の半数以上が（自然保護について、ゴミや資源の問題について、遊び場について、道路の広さや使いやすさについて、体の不自由な人の使いやすいまちについて、放置自転車について）多少なりとも考えたことがあると分かった。しかし各設問中で（よく考えたことがある）と解答した生徒は少なく、本当に身近な問題としてはとらえられていないと考えられる

表３　まちへの意識について

設問番号	質問項目	全くない（%）			あまりない（%			たまにある（%			よくある（%）		
		男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体
Ｑ１	あなたは自然保護について考えたことはありますか。	21	12	17	30	30	30	40	45	42	9	13	11
Ｑ２	あなたはゴミや資源の問題について考えたことはありますか。	16	6	11	24	33	28	51	46	49	9	15	12
Ｑ３	あなたは公共施設の利用のしやすさについて考えたことはありますか。	23	22	23	50	43	47	20	25	23	7	9	8
Ｑ４	あなたは商店街の利用のしやすさについて考えたことはありますか。	29	21	25	40	42	41	21	25	23	10	12	11
Ｑ５	あなたは運動できる場所や施設が十分にあるか考えたことはありますか。	21	10	16	26	46	36	26	27	26	27	16	22
Ｑ６	あなたは寺や神社や遺跡などについて考えたことはありますか。	40	34	37	37	43	40	20	15	18	3	7	5
Ｑ７	あなたは遊び場について考えたことはありますか。	7	6	7	20	19	20	40	42	41	33	33	33
Ｑ８	あなたは道路の広さや利用のしやすさについて考えたことはありますか。	9	4	7	30	27	28	31	33	32	30	36	33
Ｑ９	あなたはバスや電車の利用のしやすさについて考えたことはありますか。	19	15	17	40	48	44	21	28	25	20	9	15
Ｑ１０	あなたは体の不自由な人が利用しやすいまちについて考えたことはありますか。	19	7	13	44	30	37	21	43	32	16	19	18
Ｑ１１	あなたは放置自転車について考えたことはありますか。	21	7	15	36	34	35	31	36	34	11	22	17
Ｑ１２	あなたはまちの景色やデザインについて考えたことはありますか。	36	19	28	37	52	45	16	16	16	11	12	12

４．　中学生とまちとの関わり（生活環境とまちへの意識との関係より）

ここでは、中学生個人のまちへの意識がどのような要因により影響をうけるか明らかにする為に、今回はまず「通学路・生活環境別のまちへの意識」に着目する。そして通学路を含む生活環境の違いが、中学生のまちへの意識にどのような影響を与えるか分析を行う。

尚、通学路・生活環境に着目した理由は、中学生が

年間を通して最も多く目にする風景が、通学路及び自宅周辺の風景であると考えたためである。この分析においては分析対象者１３６名（意識調査無記入１名、学区外１名）で行う。

（１）通学路・生活地域パターンによる分類

まず対象中学生の通学路分布を、その通学路パターン別に分類する。同じ地区から通学している生徒は比較的同じ道を通ることから、通学路は大きく４パターンに分けられる。この４パターン（分類区域Ⅰ～Ⅳ）の通学路を次の図１に示す。

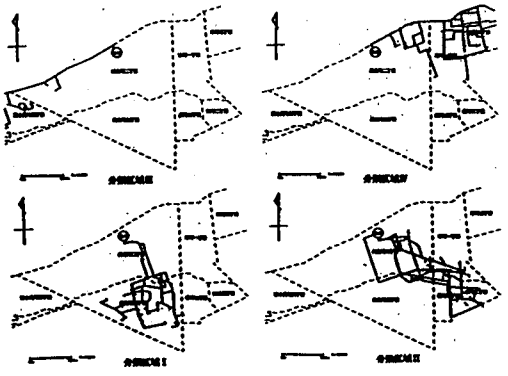

図１　通学路の分類

（２）各分類区域の概要

ここで各分類区域の概要を示す。まず各分類区域Ⅰ～Ⅳの地区構成と各分類区域の生徒数を表４示す。

表４　各分類区域の地区構成と生徒数

分類区域	地区構成	生徒数
Ⅰ	(美住町二丁目) ＋ (美住町一丁目)	５３人
Ⅱ	(美住町二丁目) ＋ (栄町二・三丁目	３５人
Ⅲ	(美住町二丁目) ＋ (富士見町四丁目)	１６人
Ⅳ	(美住町二丁目) ＋ (本町一・二丁目)	３２人

次に各分類区域Ⅰ～Ⅳの土地利用形態を次の表５に示す。

表５　分類区域Ⅰ～Ⅳの土地利用形態

分類区域名	共通区域	分類区域Ⅰ	分類区域Ⅱ		分類区域Ⅲ	分類区域Ⅳ	
	美住町二丁目	美住町一丁目	栄町二丁目	栄町三丁目	富士見町四丁目	本町一丁目	本町三丁目
公共用地率(%)	48.5	2.9	1.9	10.3	0.1	14.2	1.4
商業用地率(%)	7.3	4.4	21	8.3	7.6	14.1	4.2
住宅用地率(%)	13.2	43.5	39.8	36.1	41.3	31.4	52.3
工業用地率(%)	0.5	1.6	1.1	1.6	1.2	1.1	0.7
農業用地率(%)	0.1	0	0	0	0	0.1	0
空地率(%)	6.4	16.9	12.2	17.3	19.1	9	9.6
道路率(%)	8.6	16.2	21.7	14.9	14.2	16.1	23.7
その他(%)	2.2	5	1.6	4.2	3.7	6.5	3.4
自然地率(%)	13.2	9.5	0.7	7.3	12.8	7.5	4.7

出典：参考文献４）より著者作成

（３）分類区域別に見るまちへの意識

意識調査の解答選択肢の中で、まちへの意識を持つと明確に判断できる選択肢が（４．よくある）だけであることから、ここでは各設問において（４．よくある）と解答した生徒のみに着目する。各分類区域におけるその生徒の割合（各分類区域で設問に対し「４．よくある」と解答した生徒数／各分類区域の生徒数＊１００）を次の表６に示す。

表６　「４．よくある」と解答した生徒の分類区域

設問番号	質問項目	分類区域Ⅰ	分類区域Ⅱ	分類区域Ⅲ	分類区域Ⅳ
Ｑ１	あなたは自然保護について考えたことはありますか。	15%	9%	6%	6%
Ｑ２	あなたはゴミや資源の問題について考えたことはありますか。	15%	9%	6%	13%
Ｑ３	あなたは公共施設の利用のしやすさについて考えたことはありますか。	9%	3%	6%	13%
Ｑ４	あなたは商店街の利用のしやすさについて考えたことはありますか。	8%	11%	6%	19%
Ｑ５	あなたは運動できる場所や施設が十分にあるかを考えたことはありますか。	26%	14%	25%	22%
Ｑ６	あなたは寺や神社や墓地などについて考えたことはありますか。	4%	3%	6%	9%
Ｑ７	あなたは遊び場について考えたことはありますか。	36%	34%	19%	34%
Ｑ８	あなたは道路の広さや利用のしやすさについて考えたことはありますか。	25%	34%	31%	44%
Ｑ９	あなたはバスや電車の利用のしやすさについて考えたことはありますか。	19%	20%	0%	9%
Ｑ１０	あなたは体の不自由な人が利用しやすいまちについて考えたことはありますか。	21%	23%	13%	9%
Ｑ１１	あなたは景観自然環について考えたことはありますか。	19%	17%	13%	16%
Ｑ１２	あなたはまちの風色やデザインについて考えたことはありますか。	11%	6%	13%	19%

（４）考察

ここで以上の結果について考察を行う。

(a)「自然保護について」と「ゴミや資源の問題について」は分類区域Ⅰに住む生徒の意識が特に高い。そこで各分類区域別の緑地の割合に着目する。各分類区域別の緑地率を次の表７に示す。

表７　分類区域別の緑地率

分類区域名	共通区域	分類区域Ⅰ	分類区域Ⅱ		分類区域Ⅲ	分類区域Ⅳ	
	美住町二丁目	美住町一丁目	栄町二丁目	栄町三丁目	富士見町四丁目	本町一丁目	本町三丁目
緑地率(%)	37.9	29.6	7.9	23	31.5	14.6	16.5

出典：参考文献４）より著者作成

表７より共通区域を除いた各分類区域別の緑地率は、各地区ともほぼ同じであることが分かる。そこで各地区の周辺状況について調べると、分類区域Ⅰの周辺にだけ大規模な都立公園があることが分かった。これより各分類区域の中では、分類区域Ⅰが最も緑地に接する機会が多いと考えられる。

(b)「公共施設の利用のしやすさについて」は分類区域Ⅳに住む生徒の意識が特に高い。そこで各分類区域別の公共施設の割合に着目する。各分類区域別の公共用地率を表５に示す。表５より共通区域を除いた各分類区域別の公共用地率は、分類区域Ⅳが最も高いことが分かる。また、市の主要公共施設である市役所・警察署・図書館・税務署等もこの区域にある。これより各分類区域の中では、分類区域Ⅳが最も公共施設に接する機会が多いと考えられる。

(c)「商店街の利用のしやすさについて」は分類区域Ⅳに住む生徒の意識が特に高く、次いで分類区域Ⅱに住む生徒の意識が高い。そこで各分類区域別の商店街の割合に着目する。各分類区域別の商業用地率を表５

に示す。表５より共通区域を除いた各分類区域別の商業用地率は、分類区域ⅡとⅣが共に高いことが分かる。またこの区域には、大規模な駅である東村山駅と久米川があり、共に商店街が栄えている。これより各分類区域の中では、分類区域ⅡとⅣが最も商店街に接する機会が多いと考えられる

(d)「道路の広さや利用のしやすさについて」は分類区域Ⅳに住む生徒の意識が特に高く、次いで分類区域Ⅱに住む生徒の意識が高い。そこで各分類区域別の道路状況に着目する。各分類区域別の道路率を表５に示す。表５より共通区域を除いた各分類区域別の道路率は、分類区域ⅡとⅣが共に高いことが分かる。また分類区域Ⅱは主要地方道である府中街道と新青梅街道が交差しており、交通量が激しい。分類区域Ⅳについても、主な市道である鷹の道と主要地方道である府中街道が交差しており、交通量が激しい。これより各分類区域の中では、分類区域ⅡとⅣが最も道路環境に接する機会が多いと考えられる。

(e)「バスや電車の利用のしやすさについて」は分類区域ⅠとⅡに住む生徒の意識が特に高い。そこで各分類区域別のバス・鉄道路線配置状況に着目する。

各分類区域の周辺には同じように最寄り駅が存在する。（分類区域Ⅰ：八坂駅、分類区域Ⅱ：久米川駅、分類区域Ⅲ：武蔵大和駅、分類区域Ⅳ：東村山駅）これよりどの分類区域も、鉄道に接する機会を同じように持つと考えられるので、ここではバス路線のみに着目する。学区内のバス路線配置は次の図２より、分類区域Ⅰ、Ⅱの通学路を横切るように通っている。これより各分類区域の中では、分類区域ⅡとⅣが最もバス路線に接する機会が多いと考えられる。

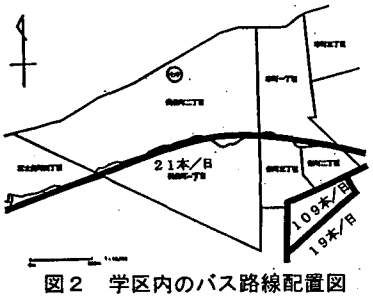

図２　学区内のバス路線配置図

以上の項目については、生活環境とまちへの意識との間に深い関係があることが分かった。しかし以上で考察した項目以外については、現時点では生徒がこれらについて高い意識を持つ要因が生活環境であると言えるだけの顕著な情報が認められなかった為、明らかになっていない。

５．　まとめ

中学生とまちとの関わりとして、全体的にまちへの関心が薄れていることが分かる。この事から授業の初期段階でまちへの関心をいかに与えるか、その工夫が必要である。この一案として、まちへ出ての体験的な学習が効果的であると考えられるが、事故等の責任や補償の問題から実際に行うまでには多くの課題が残されている。そこで男女それぞれの興味（男子：環境地、スポーツ施設、遊戯）、（女子：公共施設、商店街）をどの様に活かしていくか、また視覚的効果等をいかに活用していくかが今後の課題となるのではないか。

また中学生は各施設や場所を個々（自分の目的の対象）としてはとらえているが、まち全体の中での各施設や場所の役割まではとらえられていない。そこで、中学生のまちに対する視点をいかに変えていくか、効果的ツールの開発が求められる。この一案として、デザインゲームなどの手法が挙げられるが、教える側の資質により影響が出る等の問題があり、更なる手法の開発が必要である。

また生活環境の違いにより、無意識のうちに子どものまちへの意識にも違いが出ていることも忘れてはならない。このことから、都市計画における都市環境の整備が、子どもに与える影響について考える必要がある。

【補注】

[1]民間非営利組織(Non Profit Organization)の略称。

*[2]東村山市の概要：東京都心より 30 Km北西、東西 5.83 Km、南北 3.09 Km、総面積 17.17 Km^2の都市。1998 年 10 月時点、人口 138、994 人。

【参考文献】

1）「子どものまちづくり学習」支援体制開発のための一考察　三輪千夏　土木学会学術講演会後援概要集　1998.10

2）環境教育のための人づくり・場づくり　Ｈ４年度環境庁委託業務　子ども達に対する環境教育の充実に関する体系的調査報告書　財団法人　日本地域開発センター　1993.3

3）子供の為の都市計画学習のあり方に関する研究調査　報告書　（財）名古屋都市センター　（社）日本都市計画学会　1995.3

4）東村山市土地利用現況調査　報告書　1998年３月　東村山市

5）東村山市地域生活環境図表　1994年７月　東村山市